

平成20年度最終報告書

コード
番号 08-A-259

被助成者 認定 NPO 法人 アジア日本相互交流センター・ICAN ⑩

フィリピン・ミンダナオ島の紛争によって影響を受けた子どもの平和構築事業

1、活動の背景・目的

1-1、背景

日本から飛行機でわずか数時間の距離にある島、フィリピン・ミンダナオ島。この島の歴史は外部者に翻弄され続けた悲劇そのものである。

古くは先住民族やイスラム教系住民が暮らしていた同島だが、16世紀のスペインのフィリピン侵略の過程で、ミンダナオ島は抵抗運動の舞台となり、紛争の歴史が開始する。その後のアメリカのフィリピン植民地支配下では、フィリピン北部のルソン島(キリスト教系)住民の「入植政策」がこの島で行われ、日本からの独立後も中央政府の資源獲得のために、また大地主制批判をかわすために、その政策は継続された。イスラム教系住民は土地所有や森林資源へのアクセスを法的に制限¹されるなど、政治経済的にも迫害、搾取され、土地を追われてきた。²

このような過程の中で、イスラム教徒の自治を求める人々で結成された武装組織³と政府軍の間で、衝突が現在まで続いている。また、その二者の対立のみならず、地域では、氏間の権力争いや「子どもの喧嘩」にさえも銃器が使用されるほど、「暴力の文化」が蔓延していった。

これらの武力衝突のために、過去20年間だけでも12万人が殺害され、約200万人が住み慣れた土地を追われた。このような現状を世界に告発しようとしたジャーナリストは次から次へと殺害され、現在フィリピンではイラクに続いて、世界で2番目に多いジャーナリストの殺害者数が

記録されている。こうして、ミンダナオの紛争は、世界でも有数の「歴史のある紛争」として現在まで続いている。



このミンダナオ島中部に、2000年、2003年にフィリピン政府が「反政府」とされる勢力の掃討を名目に開始した「全面戦争(the Total War)」の激戦地、北コタバト州ピキット郊外の7つの村⁴がある。人口のほとんどをマギンダナオ族等のイスラム教徒が占めるこの7つの村では、紛争によって、学校や畑、家やモスクなど、人々の社会生活の基盤が壊滅状態となり、人々は避難先で衣食住をも欠く避難生活を送っていた。

そのような避難生活の中、住民たちは行動を開始する。川沿いにビニールシートを張り、教育を受けたことがあるものを「教師」として青空学級を開き、治安が不安定な中でも、子どもたちが教育を受けることができる環境を作り上げてきた。武力衝突が沈静化し、村に戻れても、「反政府」地域であるとの差別と偏見から孤立を深め、生活環境は悪化の一途を辿っていった。子どもたちの学校の壁には銃痕が残り、黒板も紛争中に燃料として燃やされたため残っていない。そのような環境でも、人々は子どもたちの教育を諦めることはなかった。



1994年からミンダナオ島ジェネラルサントス市において、子どもたちの教育支援事業を行ってきたアイキャンは、2005年同島の中でも、特に過酷な状況に置かれていた

¹ 1919年のPublic Land Actでは、キリスト教徒は24ヘクタールまでの土地の所有が許可され、キリスト教徒以外は、10ヘクタールまでしか許可されなかった。

² 1913年ミンダナオ島の人口の98%はイスラム教徒だったが、1980年になると、イスラム教徒の人口は23%にまで落ち込んだ。

³ モロ・イスラム解放戦線(Moro Islamic Liberation Front=MILF)

⁴ 1、プロル村 2、バゴイングド村 3、プリオク村 4、バロンギス村 5、タリタイ村 6、プロド村 7、カバサラン村。川沿いにあることから、「R7 (Riverside 7 Communities)」と呼ばれる。

この7つの村を知ることになる。住民の教育に対する真摯な姿に共感し、2006年には正式にこの川沿いの7つの村の住民の取り組みを後押しする形で、事業を開始する。

2006年から2008年の3年間は、7つの村のうち5つの村の小学校⁵において、破壊された校舎を修繕・改築するとともに、学用品の提供を行ってきた。同時に、学校や地域で、異文化・異宗教間での相互理解を促進するために、地域の平和活動を推進してきた。日本においては、ミンダナオの人々の「苦難」と文化の「豊かさ」を伝えるために、約150人の市民やミンダナオの専門家が集まった「ピース イン ミンダナオ ウィーク(ミンダナオの平和を願う一週間)」を主催したり、ミンダナオ出身者を招いての勉強会や毎月の街頭募金、署名活動を行ってきた。



7つの村の小学校の中で、最後に残された2校の教育環境は、特に厳しいものであった。それも関わらず、7つの村の中で一番奥にあるカバサラン小学校は、深い湿地帯に位置し、陸路で通うことも難しく、その建築費用の高さゆえに、状況は手付かずのままであった。一方、プロル小学校は陸路で行くことが可能だが、必要なコンクリート製の校舎を建築するには費用がかかり、同様に過去3年間取り残されてきた。

地域の子どもたちは、依然として紛争のトラウマに悩み、憎しみの中で生活を送っていたが、そのような子どもたちが当時の状況を客観的に理解し、未来のために立ち直る機会は限られていた。

1—2、目的

当助成対象事業は、2つの小学校の校舎の建築と7つの小学校での学用品整備を進めるとともに、7つの地域の子どもが参加する平和活動を実施し、地域の教育環境の向上と相互理解を促進することを目的として実施された。当事業を通して、住民が望む形での平和なミンダナオ島の構築に寄与することを目指す。

⁵ 1、バゴイングド村 2、プリオク村 3、バロンギス村 4、タリタイ村 5、プロド村

2、学校教育の回復による平和構築活動

2—1、実施経過

(1)校舎建築

2009年4月～9月 2校の建築

2009年9月 完工式

2009年9月～12月 モニタリング

(2)学用品提供

2009年6月～8月 学用品の提供

2—2、活動の内容と方法

(1)活動実施のパートナー

① ピキット郡政府

Dr. Maugan Mosaid(同郡政府アドミニストレーター)

② ピキット南地区教育省

Ms. Kalima T.Balabadan (スーパーバイザー)

③ プロル小学校建築責任者

Mr. Riduan P.Makatidtang (プロル村住民)

同校建築モニタリング担当者

Mr.Nasser Sepi (プロル小学校教師)

④ カバサラン小学校建築責任者

Mr.Datuan Mamanswal (カバサラン村住民)

同校建築モニタリング担当者

Ms. Pinky A. Labas (カバサラン学校教師)

(2)手法

ピキット市、教育省、学校、PTAと校舎の大きさや材質、建築時期等を決定するとともに、建築は高度な大工技術を有する住民や教師の現場監督のチームによって行われた。これにより、地域のニーズにあった校舎が出来上がるとともに、治安が不安定な場所での事業実施のリスクを最小限に抑えることができた。また学用品の配布は教育省、各学校を通しつつ、直接手渡す形で実施された。

(3)内容

プロル小学校にコンクリート製の1教室、カバサラン小学校に木造の3教室を建築した。また7つの小学校の子ども達に学用品を提供した。

2-3、活動の成果

(1) 短期的な成果

① 子どもたちの教育環境の向上

これまで校庭の木の下など野外で授業を受けていた2校の子どもたち113名が、教室の中で安心して勉強できるようになった。また学用品不足により勉強に支障が出ていた7校の子どもたち1,785名の勉強する環境が整えられた。

② 親の教育意識の向上

長年の紛争と教育環境整備の遅れから、地域の住民の教育レベルは極めて低く(地域の人口に占める最終学歴が無就学のもの23%、小学校卒業未満68%)、親への教育に対する意識を向上させることも重視した。村に魅力的な校舎が出来上がり、子どもたちの教育環境が目に見える形で整備され、また完工式に親やPTAが多数参加し、自分たちの子どもの教育に対するコミットメントを述べるなど、親の教育への意識の向上が見られた。

③ 教育省のコミットメントの向上

すべての活動のプロセスに教育省が入ったことで、教育省の地域へのコミットメントが向上し、カバサラン小学校では新校舎建設に伴い、2名の教師を新たに配置するとともに、プロル小学校では建築された校舎で使用する机や椅子、黒板等の費用を教育省が捻出し、子どもたちに提供された。これらは当初教育省内で予定されていなかったが、本事業に影響され、成し遂げられたもので、教育省のコミットメントの向上が見られた。

④ 地域の相互理解促進への貢献

同地域は紛争終了後も、社会サービスが届かない状況に置かれてきたため、住民は行政に対して不信感を抱いていた。しかし、今回住民とピキット郡、教育省が協力して建設を進めたことにより、相互理解が促進され、完工式においても、すべてのステイクホルダーがこれからは協力して、子どもの教育を守ることが約束された。

(2) 中期的な成果

生徒数の増加

本助成対象事業を含め、2006年からの4年間の事業で、荒廃していた7つの地域の小学校の整備を進めてきた結果、以下のように大幅な生徒数の増加が見られた。

7つの村での小学生数推移			
小学校名	05-06	07-08	09-10
① プロル	210	135	174
② バゴイングド	269	305	327
③ プリオク	316	335	269
④ バロンギス	168	197	280
⑤ タリタイ	151	188	337
⑥ プロド	125	206	228
⑦ カバサラン	220	393	618
合計	1,459	1,759	2,233
05-06 対比率	100 %	120 %	153 %

(出典:教育省)

3、地域平和活動

"A School-based Workshop for Peace and Healing among Children affected by armed conflict in the 7 Riverside Communities of Pikit, North Cotabato"

3-1、実施経過

2009年7~9月初旬

治安確認と各ステイクホルダーとの調整

2009年10月 地域平和活動実施

「学校を基盤とした癒しの平和ワークショップ」

(1日目 2009年10月20日(火)8:00~17:00)

(2日目 2009年10月21日(水)8:00~17:00)

2009年11月

ワークショップ評価

3-2、活動の内容と方法

(1) 活動参加者

紛争を体験してきた合計91名の子ども

① 1日目(子ども参加者計47名、引率校長計4名)

プロル小学校12名

カバサラン小学校12名

プロド小学校12名

タリタイ小学校11名

② 2日目(子ども参加者計44名、引率校長計3名)

バゴイングド小学校16名

バロンギス小学校15名

ブリオク小学校13名

(2)活動実施のパートナー

① ピキット郡政府

Dr. Maugan Mosaid(同郡政府アドミニストレーター)

② ピキット南地区教育省

Ms. Kalima T.Balabadan (スーパーバイザー)

③ ワークショップ進行役

Balay Mindanao Foundation, Inc (現地NGO)

Ms. Belle Garcia Hernandez

Ms. Sabrina Garcia Balais

(3)手法

平和活動は、子どもたちが自らの経験や感情、夢を最大限に表現できるよう、絵画や踊り、歌、語り合い等の芸術の要素を多用した。同時に、安心できる雰囲気を作り出し、子どもたちが心に潜んだ「見えないストレス」を、楽しく発散できるよう心がけた。

当初7つの村で実施を予定していたが、村で氏間の抗争が深刻化し、治安が悪化した。そのため、治安が比較的安定しているピキットの町の中心にあるセントラル小学校に、7つの村から子どもたちが集まる形で実施した。

(4)活動

■ *Buhay ko - Noon at Ngayon*
(僕たち・私たちの生活-過去と現在)

子どもたちは、学校毎のグループに分かれ、「紛争下の生活」と「現在の生活」を絵に描き、グループの各代表1名が絵を解説した。

「紛争下の生活」の絵に描かれていたもの

戦車、倒れた木々、武装した兵隊を乗せたトラック、人や動物の死体、ヘリコプターの音、無秩序、焼き落ちる民家、不気味さ、泣き叫ぶ子ども、混乱、銃殺される人の声、空腹、家の外へ逃げる人、恐怖、壊された学校、銃撃戦の音、茂みに潜む兵士、壊されたモスク、電気や水が無い状態、仕事が無い状態、など。

子どもたちのこえ

- ・村中が暴力と混乱に満ちていて、恐怖に震えていた。
- ・軍と反政府軍が銃で撃ち合っていた。とにかく逃げた。
- ・いつも戦車やヘリコプター、爆撃音、人々の泣き叫ぶ声を聞いていた。
- ・村に武装した兵隊を乗せたトラックがやってきた。
- ・学校やモスクは壊され、家が燃えていた。
- ・人の遺体、動物の死体が散らばっていた。
- ・村に戻っても家畜も殺され、畑もなく、空腹が続いた。
- ・村に戻った後も、怖くて学校に行けなかった。

「現在の生活」の絵

陽の照る学校への道のり、舗装された道、喜ぶ子どもたち、川で魚を釣る人、カラフルな花、畑で休む水牛、修理が進む学校校舎、お米、緑の木々、畑で働く人々、学年数の増加、家や村を掃除する人々、青空、幸せな様子、たくさんの生徒、平和、安心感、クラスメイトや先生との再会 など。

子どもたちのこえ

- ・村に平穏が戻り、家族全員と生活できるようになった。
- ・学校に戻り、毎日授業を受けられるようになった。
- ・壊れていた学校が修復され、教室も増えて嬉しい。
- ・教えてくれる先生の数が増えた。
- ・畑には稲や野菜が植えてあり、親が農業に汗を流している。
- ・川では漁師たちが魚を釣っている。
- ・友達と歩いて学校に通えることが楽しい。
- ・村は昔より静かになったけど、今でも武力衝突が絶えず心配。

■ *Buhay ko: Kasama ka, Kasama Sila*

(僕・私の生活:あなた、そしてみんなとともに)

この活動では、「だまし絵」を用いて、子どもたちが「自己(モロ族、マギンダナオ族)」と「他者(キリスト教徒、マギンダナオ族以外の民族)」の関係性を認識するエクササイズを行った。

子どもたちは、全く同じ絵を見ているのに、自分以外の人には絵が別なものに見える驚きと感動を体感しながら、人は生まれ育った環境や信仰、経験や慣習により、全く同じ事象を見ているでもそれを「どう認識・解釈するか」は一樣ではないことを学んだ。同じ民族・宗教の7つの村の子どもたち同士でも「見える事象が異なる」ことを実感し、同時にその相違に優劣があるのではないことを学んだ。

■ ドキュメンタリー映画の鑑賞

『MINDANAO: Healing the Past, Building the Future』(ミンダナオ島:過去の傷を癒し、未来を築く)

子どもたちは、ドキュメンタリー映画の鑑賞を通して、なぜ紛争が起きるのか、どのように起きるのか、どう解決できるのかについて考えた。ミンダナオ島にはどのような民族が住んでいるのかを思い出し、表にまとめた。そしてミンダナオに住む全員が等しく、尊厳を持って生きるためにはどうすればいいのかを話し合った。

ミンダナオ島に住む民族

マギンダナオ族、タウスグ族、マンダヤ族、マノボ族、タガログ族、イロカノ族、ビコラノ族、イゴロット族、カパンパガン族、イロンゴ族、マラナオ族、など。

ドキュメンタリーを鑑賞後の子どもたちの感想

・ミンダナオ島は自然資源の豊かな島である。
・「子ども兵」のシーンが印象的。同じ子どもとして悲しい。
・ミンダナオ島では紛争が長い間続いているが、平和を望む人たちがたくさんいる。
・ミンダナオ島はキリスト教とイスラム教徒、先住民など様々な人々が住む場所である。
・その様々な人々は、仲良く共生する事が出来る。

■ 「和解レター(Reconciliation Letter)」エクササイズ

この活動では、子どもが現在対立中の相手に宛てた手紙を綴り、仲直りをする練習を行った。子どもたちは現在喧嘩中のクラスメイトや、敵対するグループを想像して手紙の中で正直な気持ちを打ち明けた。子どもたちは、対立する相手と関係を修復する為に、自分から行動を起こすことの重要性を学んだ。

活動の後の子どもたちの感想

・手紙に気持ちを書けた後は、幸せな気持ちになった。
・相手を許すこと、相手の許しを請うことはいいことだと思った。
・誰かと誤解が起きてしまった時には、きちんと話し合うことが必要だと学んだ。

■ “Pangarap Ko, Pangarap Mo: Tutuparin Natin!”

(僕・わたしの夢、君の夢、みんなで叶えよう!)

この活動では、子どもたちが様々なレベル(「自分自身」「家族」「学校」「コミュニティ」「ピキット」「ミンダナオ」「フィリピン」「世界」など)での夢を絵に表現した。子どもたちからは、7つの村、ピキット、そしてミンダナオ島から紛争や「貧困」が無くなる平和なイメージを描いた。

そして子どもたちは、暴力のない「理想のピキット・ミンダナオ像」を現実一步一步近づけるために「僕たち・私たち(子どもたち)にできること」を話し合った。

子どもたちの「約束」

・ミンダナオのみんなが助け合い、心を1つにします。
・言い争いではなく、理解・許容し合う関係を作ります。
・対話を続けて、お互いを許す寛容な心を持ちます。
・子どもとしてきちんと教育を受け、最後まで学業を続けます。

3-3、活動の成果

(1) 短期的な成果

① 同じ経験を持った仲間作り

紛争により心に傷を抱える子どもたちが、家庭や学校で

安心して紛争の体験を振り返ることができる機会は限られてきた。今回の活動で、子どもたちは自分の心の奥にしまひこんできた体験と向き合い、共有することで、「他の村の子どもたちも自分と同じような体験をしてきた」ことを学び、辛い体験をともに乗り越えていく仲間を作ることが出来た。

② 精神的苦痛の軽減

過去の出来事と現在の出来事を子ども自身が整理することで、現在の生活に安心を取り戻すとともに、未来の平和なミンダナオをイメージ(ビジョニング)することで、将来への希望を持つことができた。また、同じ体験をした仲間がお互いに励まし合うことで、それぞれの子どもは、精神的な苦痛を軽減することができた。

③ 現状の客観的理解の促進

活動の後に行われた「なぜミンダナオで戦いが終わらないのか?」というファシリテーターの問いに対し、子どもたちは「それぞれみんな考えていること、信じていることが異なるから」と応えた。これまで同じ質問への回答としてよく聞かれていた「キリスト教徒が悪だから」や「平和を望まない人がいるから」と民族・宗教間の優劣や対立を口にする子どもは一人もいなかった。宗教や民族の善悪や優劣に紛争の原因を見出すのではなく、異文化・異民族間の認識や解釈の違いを客観的に意識し、多様性を認める子どもたちの態度が育成された。

④ 子どもの対立解消能力が向上

ミンダナオにおいて、子どもの喧嘩が家族・氏の武力衝突にまで発展し、地域全体の安全を脅かすことは、日常茶飯事である。「暴力の文化」が蔓延するミンダナオにおいて小さな対立をできるだけ早く解消し、地域全体の紛争防止を行うことはとても重要だが、今回の活動を通して、子ども同士が身近な人との対立を自らの力で解決する重要性を理解し、その力をつけることができた。

⑤ 子どもたちの平和への声の拡大

ミンダナオの平和構築において、政府と「反政府」と呼ばれているグループ間の「トップレベルの和平交渉」が強

調されてきた。そのため、草の根、特に子どもたちが、平和構築に参加できるスペースは限られ、子どもたちは「誰かが作る平和」を待たざるを得ない状態に置かれてきた。今回の活動を通して、子どもたちは、社会の一員として「子どもたちの平和への声」を上げることができ、今後もその声を更に大きくしていくきっかけを作ることができた。

4、日本国内での活動

4-1、実施経過

2009年11月15日

事業完了報告会開催(愛知県名古屋市)

4-2、活動の内容と方法

事務局長井川がフィリピンから帰国し、パワーポイントとスライドショーを交えて、建築や完工式、子どもたちの様子を伝える事業報告会を実施した。

4-3、活動の成果

ミンダナオ紛争についての理解促進

当事業の完了報告会、及び事業の範囲外であるが、毎月行ってきたボランティアによるミンダナオ紛争の街頭募金、3月に行ったミンダナオ平和イベントを通して、日本では関心がまだまだ高いとは言えないミンダナオ紛争について、一定の理解を促すことができた。

5、所感

当助成対象事業は、ミンダナオにとって激動の時期に行われたと言っても過言ではない。

事業が計画されたのは、2008年7月、6世紀もの懸念事項であった先祖伝来の土地問題について、政府と反政府組織(MILF)が歴史的合意に至った直後であった。ミンダナオの人々は、長年の紛争に終止符が打たれることを確信していた。しかし、その一か月後の8月、この合意は突如破棄され、武力衝突が発生し、ピキット北部で60万人もの避難民が発生する。ミンダナオ全土は、人々の憤りと失望で埋め尽くされた。

期待が失望に変わったとき、そこから人間が再度希望を持ち、歩いていくことは並大抵のことではない。住民にとっても、子どもたちにとっても、そして私たちにとっても、この事業の意義は、「失った希望を再び取り戻すこと」、つまり「1歩1歩前に向かって歩んでいるという実感を得ること」であったように思える。

■ 子どもたちの傷ついた心

一連の活動を経て、私たちが再認識させられたのは、子どもたちの心に残る、余りに大きい傷跡である。一番紛争が激しかった2003年当時、4歳から10歳であった子どもたちは、家族や友人が殺されたり、村や学校、家が破壊されるのを目撃し、その時の様子を今でも鮮明に覚えている。実際に子どもたちが描いた「紛争下の生活」の絵には、陸や空からの爆撃や銃撃に対して、逃げまどう人々や、避難所で空腹や病気に苦しむ自分や家族の様子が生々しく描かれていた。現在も銃撃の後が残る校舎の壁など、子どもたちの周りには、常に「破壊」を想像させるものが溢れており、それらは今もなお、子どもたちに影響を与えていることが分かった。

■ 大人やメディアの影響

また子どもに影響を与えているのは当時の体験だけではない。今回のワークショップの中で、子どもたちがよく使っていたフレーズに、「武装して村を襲った政府軍」を指す「sundaron christian(クリスチヤンの兵士)」というものがある。子どもたちに、「イスラム教徒の政府軍はいないの？」と聞くと、「いるよ。」と答える。子どもたちは、現実をしっかりと認識しながらも、「村の大人たちがそう言っているから」として繰り返し同じ言葉を使っていた。これ以外にも、キリスト教徒に対する固定観念など、憎しみの感情やそれが生まれる解釈は、子どもの内側からだけ生み出されるものではなく、周りの大人やメディアが強く子どもに影響を与えていることが分かった。

■ 子どもたちは積極的に平和な地域をつくる市民

そのような暴力が日常化し、生と死が隣り合わせの状況下で育った子どもたちだが、子どもたちは「平和なコミュ

ニティ」像を夢見る力を、確実に持っている。紛争と避難を幼い頃から強いられながらも、子どもたちはその繰り返しには必ず終わりがあると信じ、「平和は自分たちの手で実現していくもの」と認識している。子どもは、単なる平和の「受益者」ではなく、積極的に平和な地域をつくる市民であることを再認識させられた。

■ 学校は平和のスペースそのもの

活動の中で子どもたちが描いた絵を眺めていると、すべてに共通のものがあることに気がつく。「紛争下の絵」には、空爆と陸軍の侵攻により、学校が燃やされているシーンが多く、一方、子どもたちの「現在の生活」の絵の中心には、学校とその周りに花や木々で溢れる庭、遊びや勉強を楽しむたくさんの子どもたちの姿が描かれている。学校は子どもたちの社会生活の中心に位置するもので、安堵感や仲間への帰属感を与える平和のスペースそのものであることを、子どもたちから学ばせてもらった。

■ 学校は夢を叶える舞台

また「学業を最後まで終え、家族の生活を楽にすることが夢」と語る多くの子どもたちにとって、学校はその夢を叶える舞台である。子どもたちは、壊された学校の修繕、そして新しい校舎の誕生を大きな喜びと感じ、学業への意欲をますます高めていた。紛争地に生きる多くの子どもたちにとって、学校に行ける状態自体が「前向きに生きること」に大きく貢献していることに気付かされた。

地域において子どもたちが教育を受けられない環境は、子どもたちが生きるために、若くして銃を持たざるを得ない1つの要因となっていた。今回の事業のように、より多くの子どもたちが教育を受けられる環境を整備していくことは、単に「子どもの権利」を守るのみならず、子どもが前向きに生きる力をはぐくみ、将来の可能性を広げ、武器による問題解決以外の道を歩ませるといった平和構築活動そのものであることを実感した。

■ 遠く離れた人や地域をつなげる平和活動の重要性

2008年8月日本では、「朝バナナ」という言葉が、その

「ダイエット効果」と「手軽さ」とともに、ワイドショーや雑誌に取り上げられていた。一方、そこから飛行機で数時間の距離にあるミンダナオ島、日本で消費されるバナナのほとんどはそこからやってくる。そこでは、同じ2008年8月に武力衝突によって、60万もの「避難民」が発生し、人々はかろうじて雨を避け、「空腹」をこらえていた。「朝バナナ」の過熱ぶりに対して、この避難民のことが日本で報道されることは、ほとんどなかった。ミンダナオの紛争が今でも続いている理由の1つに、この「世界の無関心」がある。

今回事業を行う上で、日本の地域の平和活動とミンダナオの地域の平和活動をつなげることを重視した。日本でミンダナオの勉強会や街頭募金、イベント等を行い、ミンダナオの平和を願う人々を増やしていく。同時に、校舎の完工式において、「これは日本の多くの子どもや大人たちが少しずつ貯金をして、集めて作られた学校だから、私たちが銃を持って闘うのではなく、子どもたちが勉強できるように一致団結しよう！」と一人の村の大人がスピーチをしたように、ミンダナオの地域の人が遠く離れた地域の人の「ミンダナオへの平和の願い」を受け止める。そして、事業を通して出会ったミンダナオの子どもや大人の平和への熱い想いと行動を、報告会や勉強会という形で、更に日本の地域の人へと返していく。

国の境界を意識して活動を行うことが重要という認識には立脚しないが、遠く離れていたり、立場の全く異なる人や地域が、NGOという媒体を通して、ミンダナオの平和を願うという一点でつながり、活動・運動を盛り上げ、市民社会を構築していくことはとても重要であると改めて学んだ。

6、今後の課題

■ 高校レベルの教育環境の整備

今年までに7つの村の小学校の校舎を建設し、学用品を提供してきたことにより、生徒数の増加等、一定の成果を出すことが出来た。一方、現在の小学生が卒業後に通う予定の高校(フィリピンは中学校がなく、小学校と高校が義務教育)は遠く、通学することが困難であるために、7つの村の中心に設備の整った高校が必要となっている。

■ ミンダナオの子どもたちの平和活動

今年までに、地域の大人を巻き込んだ平和活動や子どもだけの平和教育活動等を実施することができたが、今後は、キリスト教徒の子どもたちやより多くの民族の子どもたちを含んだ形で、相互理解を促進していくことが求められている。実際に村に住んでいる多くの子どもたちは、兵士以外のキリスト教徒の子どもにも会ったことが無く、この交流の機会の欠如によって、相互理解が制限されている。

■ ミンダナオ紛争の理解浸透と市民社会の成熟

日本はミンダナオ島から、バナナ等のフルーツのみならず、魚や木材等、多くの資源を輸入し、とても関係が深いにも関わらず、日本においてミンダナオ紛争の認知度は、依然として低い。今後も引き続き、ミンダナオで活動する数少ない日本のNGOの1つとして、ミンダナオ紛争の理解浸透に努めていく必要がある。

謝辞

この度、貴庭野平和財団から助成をいただき、ミンダナオ奥地に住む子どもたちが安心して勉強できる校舎が2つ建てられ、子どもたちが平和活動に参加することができました。そして同時に、私たちは住民や子どもたちに勇気付けられ、彼ら・彼女らから多くのことを学ばせていただきました。

私たちはこれらの学びを広く共有し、世界中の人々と連携し合い、いつの日か戦争や「貧困」等の暴力によって、子どもたちが脅かされることのない社会を実現したいと考えております。

このような機会を与えてくださった、そして多くの団体にこのような機会を与え続けている貴庭野平和財団の皆様、心より感謝いたします。

(以上)